生水(しょうず)の郷　～琵琶湖西岸へ～

松下　忠義　（まつした　ただよし／関西グループ）

Ⅰ）10月19日から一泊二日で、関西グループが企画したエコツアー、滋賀県高島市針江地区にある「生水の郷」の「かばた（川端）」を体験見学するツアーに出かけました。この地域は、比良山系の伏流水から清涼で豊富な湧水がでており、これを住民は生水（しょうず）と呼んで、生活用水として使って来ました。

家屋の内外に井戸を掘り、湧水を飲み、大根の泥を落とし、食器を洗って用水路に流し出す、このシステムを「かばた」と呼んでいます。放出する水は、泥は沈め、食器の食べ残しは飼っている鯉たちが食べつくすので、きれいな水に戻っています。

関東、関西から総勢14名（部分参加あり）が参加しました。19日はJR湖西線「安曇川」駅横のWest Lake Hotel「可以登楼（カイトロウ）」で一泊、散策と夕食、翌20日に隣の「新旭」駅へ、タクシーで「生水の郷案内所」へ。かばたの案内は2班に分かれてガイドさんに同行してもらい、説明を受けました。約2時間。

昼食は「川新」で地元食材を使った料理をおいしく戴いて、続いて地元関係者と交流会を持ちました。午後2時頃に解散、JR湖西線「新旭」駅から帰路につきました。

Ⅱ）さて、針江地区は約160戸が住み、大半の家庭が古くからかばた井戸を持っています。その中で公開されている6～7軒の庭に小屋がけの井戸に下りて湧水の中に手を入れたり、また飲みました。常温13℃、うまい！井戸によって味が異なるとの声も。湧水量は2L瓶に2秒で満タンになるほど多いのです。

20日の案内時にはずっと雨に降られましたが、これもまた風流。傘をすぼめて井戸に下り、また傘を開いてかばたの道を散策、家々の庭に鮮やかな色の花々が濡れて更に美しい。

散策の途中に曹洞宗の名刹・正伝寺がどっかりと坐っていて、創業100年の老舗豆腐店、竹で作る「かばたトンボ」のクラフトショップ、苔むす水車なども点在。地域内を流れる針江大川には清水に繁茂する梅花藻（ばいかも）が流れのままに揺らいで、鮮やかな緑色を映していました。大川は年に数回住民たちで清掃しているとのことでした。川はやがて琵琶湖へ。

Ⅲ）20日の昼食後に「針江生水の郷委員会」の橋本剛明さん（ガイドして戴いた）と座長の美濃部武彦さんに来場願って、交流会を開きました。見学者の急増により、住民のプライバシー保護の必要性からも、ガイド制によるしっかりした見学の組織作りに注力して今日の委員会に至った10年に亘るヒストリーを聞きました。

美濃部座長は本組織関係者65名の意見集約する難しさを、苦悩の表情を浮かべながら説明されました。氏はNPO法人に改組したかったが、関係者たちの知識不足もあって、成功しなかった、と話されました。しかし私たちはNPO法人への改組は時限がないので、そのように決意すれば、既に実績を積んでおられるので困難ではない旨伝えました。NPO法人になればミッション（使命感）を明確にできるし、賛同する人達だけで運営できるので意見集約及び実行が容易になり、メリットは大きい、と感じました。

一方、現在の組織運営の中で、多くの住民たちの優れた能力を引き出せたと、喜びと自信の述懐もありました。今のガイドシステムは細部に亘ってよくできていると思いました。

Ⅳ）「生水の郷」は豊かな水の恩恵を受けている素晴らしい見本であります。私たちはこのエコツアー体験から「足るを知る」自己完結型の生活を学び評価するとともに、今度は自らの生活の場でどのような環境の仕組みを作るのか、具体的に考え及んで行かなければならないと思いました。

また将来に繋がる課題として次の世代に継承し発展する仕組みを作る必要があります。多くの小学生たち、ここにやって来て湧水を飲み、遡上する鮎をつかみ取りする‥。自然に触れ、自然を尊ぶ、そこに環境負荷の少ないエコ生活をしようとするきっかけを作る、「生水の郷」はそんなパラダイムへ進ませる大切な資産であると考えました。